
海難事故

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海難事故

【Nコード】

N4038E

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

高校生の渉が旅先で目にしたものは

高校生の西条涉^{さいじょうわたる}は、仲の良い友達3人と夏休みを利用して1泊2日で海の見える旅館に来ていた。

目的は勿論海水浴。

電車とバスを利用して来たこの辺りは人も少ないので、存分にハメを外して泳げるというものだ。

旅館の中に入る。

「あの、4名で予約した者なんですが」

渉がフロントの妙齢の女性に声をかけた。

「お待ちしておりました。部屋は2階の角^{かど}でございます」

言われ、鍵を渡された。

「夕食は6時に運ばれてきます。それと大浴場はいつ使っても構いませんので。では、ごゆっくり」

階段を上がり、早速2階の部屋へ行く。そんなに広くはないが、4人がザコ寝するには不満無い広さの畳部屋だ。

「意外と良いな」

「なんか民宿って感じだよな」

4人はドカドカと荷物を置き、水着等の必要な物を袋に入れて海水浴場へと行く。

旅館が海の近くに建てられているので、30秒もあるけば海水浴場がある。

道では太陽が地面を照り付けて陽炎を生み出している。

早くも汗が出るが、もうすぐ楽園が待っている。

海水浴場まで着くと、トイレ兼シャワールームのような所で水着へと着替える。

丁度個室が4つあったため、スムーズに出来た。

着替えが終わると、4人は海にはいった。

「ぷっは、気持ちいいな！」

渉が言う。

「ほんとに、人も少ないしな」

「俺ちょっと遠くまで行ってみようかな」

そういうと、渉は遠くの岩場まで泳ぎだした。

「気を付けろよ」

そう言われながらも、渉は快調なスタートを切った。

彼は水泳部に所属していて泳ぎが達者で、皆は大丈夫だろうと心配する事なく各々楽しんでいた。

案の定、華麗なクロールで順調に岩場に向かって泳いでいた。

だが、もう少しで岩場に着くというところで

「うっ・・・痛・・・」

足が攣ってしまった。

渉はもがくが、足が動かない。

叫ぼうとしたが、口の中に海水が入り込み、喉を圧迫してそれを不可能なものにした。

気が付けば、体は沈んでいた。

万事休す、そう思ったとき、軟らかい何かが渉を包んだ。

何だろうと思う間も無く、渉は意識を失った。

「い・・・ぶか・・・おい！おい！！！」

友達の声で、渉は目を覚ます。

渉は砂浜の上で横たわっていた。

「目が覚めたか」

「あれ、俺確か・・・」

「まったく、お前岩場で気失ってたぞ」

「マジか・・・」

「今日はもう旅館に戻ろうぜ」

そして、渉達は旅館の部屋に戻った。

時計を見る。4時。夕食まであと2時間ある。他愛の無い話をして時間を潰し夕食を待った。

2時間が経つ。女将がふすまをゆっくり開け、4人分の料理を運んできた。

海の近くだけあって魚がメインだ。

女将は「ごゆっくり」と一礼して出て行った。

食べながら、今日の事を話す。

「けどさあ、今日はほんとに吃驚したよ」

「渉泳ぎが上手いのかな」

「心配かけちまってごめんな」

早々に食べ終わり、デザートのお菓子が欲しくなった4人はジャンケンをしてコンビニにお菓子を買いに行く役目の奴を決めた。

渉がグーを出したら、他の皆はパーを出した。

ブツブツ言いながら、皆がリクエストした物を紙に書き留める。

「じゃ、頼むぜ」

「へいへい」

財布を持って旅館を出た。

夏だというのに、辺りは既に日も落ち、薄暗かった。

歩いて3分くらいのところにあるコンビニに入る。

紙を見ながら、目的の品と、ついでにジュースも2、3本選んでレジへと持って行ってレジに置く。

同時に財布から千円札を取り出して置いた。

お釣と袋に入った品を受け取り、コンビニを後にした。

渉は旅館に戻ろうとしたが、何故か自然と足が海の方へと向く。

旅館に行こうと思っているのに、違う方へと歩が進む。

やがて、海が見えてきた。

ひっそりとしている。夜の海はみんなこうだ。

その時、岩場の方から何かの気配を感じた。

見ると、その岩場には髪の長い少女が座っていた。

幽霊だと、一目見ただけで分かった。

その少女からは生気が感じられなかいのだ。

だが、幽霊に対して抱く怖いなどという感情は無かった。
気が付けば、渉は少女の方へと走っていた。

「もしかして、今日僕を助けてくれたのって君？」

渉は少女に聞いた。

「そうよ、感謝しなさい」

「そうなんだ、ありがとう」

「ありがとうじゃなくて、“ありがとうございます”でしょ」

少女は一音一音強調して言った。

「えっと、ありがとうございます」

「ここにはいつまで居るの？」

「明日には帰るけど」

「え！？ちょ、ちょっと早いんじゃない？もうちょっとゆっくりしていきなさいよ」

「え、でも・・・」

「ふん、いいわよ。さっさと帰れば？」

「えっと・・・？・・・はい」

渉は手にコンビニの袋を下げながら旅館へと戻った。

途中で後ろを振り返る。

その少女は、何故か悲しそうな目をしていた。

「渉遅いぞ、何してたんだよ」

部屋に入った途端友人から言われた。

さすがに幽霊と会っていたなんて言えない。適当に誤魔化す。

「悪い悪い、さ、ついでにジュースも買ってきたから皆で飲もう」

「お、気が利くな」

部屋に置いてあったコップにジュースを入れる。

適当にお菓子の袋を開けると、それぞれ好みの物に手を伸ばした。

楽しく雑談しながら食べるお菓子は最高だった。

お菓子はあつという間に無くなった。

誰かが言い出す。

「つくあゝ、そろそろ眠い」

「ってもう時間遅いな」

時計を見ると、確かに11時だ。

「って風呂はどうすんだ」

「いいじゃねーか、海できれいになったろ」

「明日もちよつと泳ぎたいし、そろそろ寝ようぜ」

「おう」

手を蛍光灯の紐に伸ばし、スイッチを切る。

そして、4人は布団も敷かずにごろごろと横になった。

“ムニユ”

夜中、渉はそんな柔らかい感触に目が覚めた。

手が何かに触れている。

その何かは水を帯びていた。

半分寝ている渉にはそれが何なのか脳内で分析するには至難だった。

(まいいか、おやすみ)

再び眠りについた。

朝、渉は一番に起きた。

起き上がってふと自分の寝ていた畳を見ると、何故かそこだけぐっしり濡れていた。

暑くて寝汗をかいたのだろうか。だが汗にしては肌にベタベタ感が無い。

そういえば今日も海で泳ぐとか言っていたが、大丈夫だろうか。

時計を見ると、もう10時を回って30分になっていた。

バスが出るのは一日3回。11時と4時と7時のバスだ。

11時のバスを逃したら面倒な事になる。

渉は皆を起こす。

「うっそ、マジかよ」

一人がぼやきの声をあげる。

「もう諦めろよ、また来年も来ようぜ」

「だな」

4人は荷物をまとめ、フロントの女性に鍵を返した。

またお越し下さいと言われて旅館を出ると、4人はバス乗り場へと走った。

バス乗り場はここから20分ほどかかる。急がないとマズい。

バス乗り場に着く。丁度バスも着いたところだった。

危なかったと思いながら、バスに乗る。

バスで駅まで行くと、電車に乗り自分達の町まで帰った。

「じゃなく」

「おう、またな」

「じゃな」

各々手を振った。

それぞれの家は離れているので別々に帰った。

渉は水泳部の夏休みの練習の為学校に来た。

部活で水着になるため私服だ。

蝉の鳴き声を聞きながら、更衣室へと向かう。

そこはまだ誰も来てなく、整然としていた。

先に練習をはじめようと水着に着替えた。

シャワーを浴びて体をきれいにしてプールサイドに出る。あの時のような事にならないよう、しっかりと準備体操した。

ふと、辺りを見回した。

何故今まで気付かなかったのだろうか、プールサイドの隅にはあの時の少女が立っていた。

渉は少女のいる方へと駆け寄った。

「何でここにいるの？」

「あんたがドジだから私が守らないとまたあの時みたいに溺れるで

しょ」

「いや、その必要はないって」

「うるさい！人の親切はちゃんと受け取りなさい！！」

「じゃ、お風呂の時とかも憑きまとわれるのかな？」

渉は首を傾げた。

すると、少女は顔を赤らめて言った。

「・・・・・・・・・・バカ／＼」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4038e/>

海難事故

2010年10月28日07時56分発行